

# MUSTはなぜ強い義務を表すのか

高橋 正

## 序. 論文の目的

中英語期から近代英語初期にかけて助動詞の意味変化が集中して起きている。法助動詞の多くがこの時期にOE期から保持していた原義を失い、1つの意味に関して、それを表す法助動詞が1つの法助動詞から別の法助動詞に連鎖的に変化していったからである。このような法助動詞の意味変化は、強い法的意味を持つ助動詞の観点から行われてきた。弱い法的意味を持つ助動詞は、強い法的意味をもつ助動詞に付随しているものとして考えられて、弱い法的意味を持つ助動詞の意味変化には今までそれほど注意が向けられていなかったと言える。

弱い意味の法助動詞とは、通常、助動詞の過去形で表されるものである。弱い意味を持つ法助動詞過去形の意味変化を見ると興味深いことに気がつく。下に示したように、弱い法的意味をもつ *moste* (> *must*) が現在を意味して、強い法的意味を持つようになり、さらに、*shall* が義務の意味を失ったあとも *should* は弱い義務の意味を現代まで保持しているということである。

意味	知る	可能	許可	義務	未来時制
OE					
現在形	can	→ may	→ <i>mot</i> <sup>1</sup>	→ shall	→
過去形	could	→ might	→ <i>moste</i> (> <i>must</i> )	→ should	
Mod.E					
現在形	know	can	may	must	shall
弱い意味の助動詞		could	might	should	—

(矢印は現代英語への意味変化の方向を表す。つづり字は *mot*/*moste* を除いて現代

英語のもの)

このmustについて、OEDは次のように説明している。

The use as a present arose from the practice of employing the past subj. as a moderate, cautious, or polite substitute for the present indicative. The modern use as a past tense coincides with sense 2, but app. does not historically descend from it, exc. that the preterital use in *must needs* (see *need*, *needs advs.*) may perhaps represent a continuous survival. [sense 2とは「義務」を表す *mote* の過去のこと] (MUST II.)

mustが本来、仮定法過去形で、直説法よりも控え目で丁寧な言い方、言い換えれば、「弱い義務」の意味であった。本来仮定法である *moete* (>must) が弱い法的意味からの発達だとすると、現代英語でなぜ強い義務を表すのか説明が必要になる。あとで述べるように、*ought*, *should*は、mustと同様、本来、仮定法過去形であり、その意味するところは現代英語でも弱い義務だからである。この小論ではmustがいかに強い意味を持つ法助動詞になったのかについて考察し、1つの可能性を提案する。

### 1. 強い義務と弱い義務の法助動詞

mustと*should/ought to*の意味の違いは、命題部の実現性の有無である。Palmer (1979, 1986) は、mustと*should/ought to*の違いは、命題部の出来事が実現したかどうかの違いであり、*should/ought to*では、出来事が実現しないことを含意すると述べている。

\*He must come, but he won't.

He *should/ought to* come, but he won't. (Palmer (1979) 6.4.1)

同じ趣旨のことは、Huddleston and Pullum (2002) でも次の例をあげて述べられている。

I *should* stop now but I'm not going to. [9.4.1]

Coates (1983) は、法助動詞の意味を正確に記述するために、ファジィ集合理論に基づく漸次的推移性の概念を導入している。彼女が採用した漸次的推移性概念の1つに、根源的意味の場合に適用される「強い」(strong) 意味と「弱い」(weak) 意味の

連続性がある。

Coatesは、根源的 (root) mustの意味は、強い義務から弱い義務への傾斜的意味変化 (cline) があるとはいうものの、mustの中心的意味は「強い義務」であるとして、つぎのような特徴を挙げている。

- (i) 主語は有生 (animate) である。
- (ii) 主動詞は行為動詞 (activity verb) である。
- (iii) 話し手は主語にその行為をさせることに関心がある。
- (iv) 話し手の方が主語よりも権力を持っている。 (Coates (1983) [4.1.1.2])

それに対して、shouldの最もよく用いられる用法は「弱い義務」である。根源的 mustは、上の (iii) のように話し手はある行為をすることを聞き手に要求するときに用いられるのに対して、根源的 shouldの場合は、その行為をすることを示唆するだけであり、聞き手が話し手の言うことに従うであろうという期待はない。

根源的 oughtについても、根源的 shouldとほぼ同義であり、弱い「義務」を表す。それは根源的 mustがもつような命令を下すというよりも、忠告するという意味である。

この小論では、Coatesの区別にしたがって、mustは「強い」義務を表し、should/ought toは「弱い」義務を表すものとする。

## 2. should/ought toがなぜ弱い義務になるのか

should/ought toが弱い義務を表すのは、どちらも本来、仮定法から生まれてきた用法であるためである。OEDによれば、法的 (modal) 意味をもつ shouldは、仮定法がその起源であり、現在形 shallによって表される意味に法的な意味を加味するものであった。義務を意味する場合も、その義務は、現実のものではなく仮想上の義務を本来表すものであった。OE *sculan* (> shall) の直説法1・3人称単数過去は *sceolde*、同2人称は *sceoldest*、仮定法単数過去ではどの人称でも *sceolde* である。つまり、*sceolde* という屈折形は直説法でも仮定法でも用いられていた。直説法複数過去は *sceoldon*、仮定法過去は *sceolden* であったが、語尾の -on と -en にはストレスが置かれなかったために混同されることも多かった。OEの後期では、形態上、直説法と仮定法の区別はかなりあいまいであった。

Goossens (1987) は、上に述べたような形態上の曖昧さがあるために、形態による区別ではなく、直説法と仮定法が用いられる文脈を区別して、OE後期の *Æflic* と *Wulfstan* に用いられている *sculan* (> *shall*) の過去形100例を調査している。その結果、*sculan* の過去形として直説法で用いられているのはわずか3例であり、どちらの法か判断のつかない1例を除いて、残りの例はすべて仮定法 (Goosen の用語では *non-indicative*) であったと報告している。OEの後期ですでに *should* の中心的用法は、*shall* の過去形ではなく、法的意味をもつ仮想上の義務を表すものであったことがわかる。この仮想上の義務の意味は、現実には課せられる義務よりも弱い義務を表すのは言うまでもないことであろう。現代英語でも *should* が弱い義務を意味するのは、本来、*should* が仮定法であったことによる。

*ought* の起源は、「所有する」を意味する動詞 *agan* の過去形である。*agan* は「所有」の意味からさらに「お金の借りがある」という意味を発達させた。現代英語で「所有」を意味する *own* と「金銭の借りがある」という意味の *owe* はどちらも OE の *agan* に由来する。*agan* の意味である「金銭の借りがある」ということはそのお金の返済の義務が生じることから、*ought* は「義務」の意味を発達させたと考えられる。

過去形の *ought* が現在の義務を意味する助動詞としての用法をほぼ確立するのは14世紀の末で、*to* 不定詞を伴うものが多かったが、原形不定詞 (*simple infinitive*) を後続させる例もあった。Ono (1989) では、Chaucer の *The Canterbury Tales* では *to* 不定詞よりも原形不定詞を後続させることが圧倒的に多いことが報告されている。*ought* に *to* 不定詞を伴う形式が確立するのは15世紀末である<sup>2</sup>。

過去形の *ought* が現在の義務の意味で用いられることについて OED は次のように述べている。

This [= *ought* が現在の意味で用いられること] appears to be orig. the pa. subj. (which in ME. and mod. Eng. has the same form as the indic.) used first in hypothetical or general cases; e.g. *Ought one to tell the truth under all circumstances? If it should rain, he ought not to go. If he cannot go to-day, he ought to go to-morrow.* Thence, in definite present sense, as *Tell me what I ought to do now.* The use of the pa. subj. softens the form of the expression; cf. the

parallel *you should* for *it is your duty*; also *would you* for *will you*; *might I* for *may I*; *could you* for *can you*. (OUGHT III. 5. b.)

shouldの場合と同様に、oughtは本来、仮定法で、想定された義務を表すものであった。相手に義務を課することは、相手に負担になることから義務の意味を和らげるために仮定法を用いて、現実ではなく、想定された義務として提示する用法である。OEでのaganの屈折変化は、直説法過去形は1人称・3人称単数でahte, 2人称単数でahtest, 複数形のすべての人称でahtonであった。仮定法過去は単数形のすべての人称でahte, 複数形はすべての人称でahtenであった。このような仮定法の過去形と直説法の過去形の区別が、ME期以降に屈折変化の消失によって区別がなくなった。起源的に、義務の意味を和らげるために用いられた仮定法から発達したought toは現代英語でも弱い義務の意味を担っているのである。

### 3. mustの歴史的変化

OEのmotanは本来、“to find (have) room”を意味していたと推定されている。この意味から「許可」の意味へ変化した。許可の意味のmotanには、「客観的可能性」の意味にも解釈できる例がOEに多くある。Visser (1969) は、motanの「許可」と「可能性」の意味の根底には、「運命の神 (Fate) によって分け与えられた・割り当てられた」というmotanの原義から生じたと考えている<sup>3</sup>。「運命の神によって、あることをするように割り当てられた」ということは、「運命によってそれをする自由を与えられた」ことであり、これが許可の意味になる。この「運命がそれをする機会を与えた」という意味は、それを行う可能性を含意する。それゆえに、motanが「可能性」の意味で用いられていても、OEの時代に同じく「可能性」の意味を持っていたmaganと意味合いを異にしていた。このことはmaganとmotanが並列して用いられる例が散見されることから、文体上の効果をもたらすと共に、両者がまったくの同義ではなかったことを示唆している。

Christ & Satan 420, Nu ic þe halsige..., þæt ic up heonon *mæge and mote* mid minre mægðe. (Visser (1969) §1690 より)

MEの初期のころには、motanは、願望を表す意味を持つようになる。つぎのよう

な祈願文で用いられる。

‘God mote hir conveye!’ (ibid, § 1692 より)

現代英語では次のように、mayが用いられる文脈である。この用法のmotは、19世紀までには用いられなくなり、代わりにmayが用いられるようになる。

May she rest in peace! (OALD, *may*)

motanが「義務」の意味で用いられる例はOEの後期からMEにかけて次第の多くなる。小野(1969)の調査では、motanの意味の比率がMAY(許可)よりもMUST(義務)の方が大きくなるのは、12世紀前半から13世紀後半にかけての時期である。MAYの意味のmot/mosteは使われる文脈が、願望や許可を表す動詞に導かれる名詞節や願望・目的と関係の深い目的節などに限定されていく傾向がこの時期から顕著になる。独立文では、motanはMUSTの意味で用いられるようになる。MAYの意味で用いられる文脈は仮定法が多く用いられる環境であり、MUSTの意味では直説法が多い。

過去形のmosteが現在の意味で用いられるのは14世紀に入ってからである。OEDは、現在の意味の最初の例として1300年ごろの例を挙げている。冒頭の序論で示したOEDからの引用から明らかなように、mustは歴史的にはmotanの仮定法過去形mosteから発達してきたものである。現在形のmot(e)/mootと仮定法過去形を起源とする過去形mosteが並存していた14世紀後半のChaucerの作品を調査した小野(1969)は、mot(e)/mootは、現在用法のmosteよりはmildな表現であったと考えられると判定している<sup>4</sup>。その反面、mootは1音節で、mosteが2音節なので韻律の関係からどちらかが選ばれるということもあるが、それが可能なほど両者は同義的であったとも述べている<sup>5</sup>。

その約100年後の15世紀後半に編纂されたMaloryの*The Tale of King Arthur*では、現在形のmotの例はなく、mustの例だけが見出される。この時期に、mustは現代英語とほぼ同じ用法になる。小野(1969)は、現在用法のmustは15世紀後半に確立したと想定している。

Sweet(1891)は、*A New English Grammar*の中で次のように記している。

It (= must) began with the use of the pret. subj.—which was practically

indistinguishable from the pret. indic.—to express mild command, so that *pou mōste* = ‘you would be able,’ ‘you might’ was understood to mean ‘you will have to,’ ‘you must.’ (§1482)

Sweetは、現代英語のmustの「義務」の意味は、弱い「許可」を意味する仮定法から発達してきたと考えている。現在から見るとこれは明らかに誤りであるが、ここに意味変化に関して2つの問題が浮き彫りにされている。1つはなぜ「許可」の意味から「義務」の意味へと変化したのかという問題である。2つめの問題は、仮定法のもつ「弱い」法的意味から「強い」法的意味への変化である。次節では、このうち前者の問題を取り上げる。

#### 4. 許可から義務への意味変化

motanは「許可」から「義務」へと、一見大きく異なる意味に変化したのはなぜだろうか。まず考えられる両者の意味論的接点は否定文脈である。OEDのmoteの項目は次のように述べている。

This transition from this (許可の意味) to the sense ‘is obliged, must’ is more difficult to explain; it may have arisen from the use in negative context, where the two senses (‘may not’, ‘must not’) are nearly coincident.

許可の否定は「禁止」となり、義務の否定も「禁止」となることから、mayとmustは論理的には否定文脈ではほぼ一致した意味となる。

Visser (1969) は、「許可」「可能」「義務」の3つの意味を生み出すような共通する意味がmotanにはあるというE. Standopの見解を採用している。第3節でも述べたように、ゲルマン語祖語にまで遡るとmotanの元来の意味は、「運命の神によって割り当てられた」というものであった。この原義から、「許可」「可能性」の意味が発達したのであるが、ある条件下では、この意味は「義務」と解釈された可能性があった。運命の神によって、割り与えられたものは、神によって定められたものであり、実行することが義務となるのである。このような文脈が義務の意味へのきっかけになったのではないかということである<sup>6</sup>。

小野 (1969) も、E. Standopの考えを支持している。mayからmustに発達したと

考えずに、原義からそれぞれの意味が生じたとみることの方が無理は少なく、具体的に解釈する場合にも参考になると述べている<sup>7</sup>。

中野 (1993) では、上で引用したOEDの説明は否定的文脈においてのみ成り立つもので限界があるとして、語用論的説明が不可欠であるとしている。中野氏によれば「許可」と「義務・強要」には、意味論的、語用論的に重要な共通点がある。その共通点とは、「許可」と「義務・強要」の意味を表す法助動詞が用いられる文脈には、行為命題の表す行為の実行を統制する権限をもつ義務や許可の源が存在し、行為実行者はその統制下にあるということである。「許可」の意味は、その行為実行者が当の行為の実行を願望しているという条件を満たすときに生じる。つぎのような命令文でさえ本来は「命令・強要」を表すものであるが、その行為実行者が当の行為を望んでいる場合は「許可」を与えていると解釈できる。

Go home, John.

それに対して、「義務・強要」の意味は、行為実行者が当の行為を望んでいないときに生じる解釈である。

You can/may go now.

この発話では、相手が「立ち去る」ことを望んでいる場合、許可を与える権威のある者は法助動詞can/mayによって示されている「許可」を与えていることになる。しかし、相手が「立ち去る」ことを望んでいない場合は、「立ち去ってもよい」という許可の意味から、「立ち去ることができるのだから、立ち去れ」という「強要」の意味が含意されることになる。これは一種の会話の含意である。このような会話の含意が慣習化して、「許可」の意味は次第に「義務」を担うようになる。中野氏のこの考え方が正しいかどうかは、許可された行為が、当の行為者が望んでいない事例が、会話の含意を慣習化するほどの頻度であったかどうか明確にならないと判断できない。さらに、現在形のmotではなく、なぜ過去形のmosteが強い「義務」になったのかということに関して説明がなされていない。

Traugott and Dasher (2002) は、許可された行為を相手が望んではないという文脈は非常に限定的で、義務の意味を生み出すほどのものでないと考えている。さらに、mosteが過去形であることから許可が過去の文脈で行なわれることに注目している。



現代英語で次の文は「私」が実際に車を借りたことを強く含意する。

He allowed me to borrow his car.

許可が過去に行なわれたことを意味する文では、許可されたことが実際に実行されたという推論を引き起こす。このことから、OEにおいても許可の報告が過去形でなされたとき、つまり「～ということが許可された」と過去のこととして述べられたとき、指示された行為や許可された行為が実行されたという含意を持っていたと Traugott and Dasher は考えている。例えば、次のような例である。

swa þa lærendum þam preostum se papa gefafode

so then advising-DAT those-DAT priests-DAT the pope granted

þæt Equitius *moste* [MS vr. *sceodle*] beon gelæded to Romebyring.

that Equitius should be brought to Rome

“so then the pope granted to those priestly advisors that Equitius should be brought to Rome.”

(c.1,000 GD 35.19 [Traugott & Dasher: 125])

2行目の *moste* が他の写本では、*sceodle* (> *should*) になっていることから、従属節の主語 Equitius はローマに連れて行かれた可能性が高くなる。このように、許可する者が、神やローマ法王、あるいは王のような強い権威をもつ場合、許可された行為が実行された可能性は高くなる。神や王が過去において許可したことが現在もその効力をもっている場合、許可された人にとっては、許可された行為は実行すべき義務となるのである。このような「許可された結果～することが義務となる」(coming to be obliged) という意味が顕著になることによって、*moste* が義務を表すようになる。Traugott and Dasher によれば、過去の許可の意味から現在の義務の意味への変化を促進する働きをしたのが、ME で *moste* と共によく用いられた副詞 *nedes* (= *necessarily*) であった。*nedes* が伴うことによって、許可されたことが実行される可能性が高くなり、義務に近い意味を表すようになった<sup>8</sup>。この副詞 *nedes* については第6節で検討する。

上の Traugott and Dasher の説明では、過去形の *moste* が、最初に「義務」の意味になり、そしてその過去形だけが義務の意味になったような印象を受ける。確かに、

現代英語では結果的に過去形の *moste* (> *must*) が義務の助動詞となっている。「～することを許可された」という過去の意味が「～する義務がある」という現在の意味に変化するためにはまず過去形が現在の義務を表す用法として、最初に現れたと予測できる。Beowulf には義務の意味の *motan* が 3 例ある。そのうち 1 例は現在形の *mot* である。次の例は OED が現在形の *mot* が義務の意味を表す最初の例としてあげているものである。

Beowulf 2886 *londrihes mot / þære mægburge monna æghwylc / idel hweorfan*  
(each man of your family will have to wander, shorn of his landed possession)  
文献を見る限りは、最も古い用法でも義務の意味を持っていたのは過去形であったとは言えないようである。

Ono (1989) では、OE の後期から ME の初期のころにかけて、現在形の *mot* が MUST の意味で用いられている例を多くあげている<sup>9</sup>。また、Chaucer では、*mot/moste* が共に義務の意味を表わしており、過去形の *moste* だけが義務の意味をもっていたのではない。歴史上、実際に現在形の *mot* が過去形 *moste* と共に義務の意味を持っていたのに、Traugott and Dasher の考えでは、なぜ *mot* が廃用になり *moste* が残ったのかという問題は解決されない。

Ono (1989) は、過去形 *moste* が現在の意味で用いられている例を *Ancrene Riwe* (c1230-50) という文献の中に見出しているが、このような初期の用法に関して、直説法の意味を和らげるために仮定法過去を用いていると考えられ、過去形の *moste* は、本来、‘would have to’ を意味していただろうと述べている。このことは Chaucer にも当てはまる。*mot/moste* が過去形と現在形で意味的に対立しており、過去形の義務は現在形よりも弱い法的意味をもっていた。このような意味の違いは過去形 *moste* が、直説法ではなく、仮定法に由来すると考えるのが妥当であることを示している。

結局のところ、*motan* がなぜ許可から義務へと意味を変えたかについて、現在のところ決定的なことは言えないようである。ただ、OE ですでに、少数ながら義務の意味にも用いられていたということは、*motan* の原義に両者の解釈を可能にする意味要素があったと考えるのが妥当であろうと思われる。また、否定文脈で許可と義務の

意味が一致することが、義務の意味への変化を促進したことは確かであろう。そして、他の法的意味を表す助動詞の意味変化にともなって、motanの意味の中心も変更を強いられることになった。つまり、許可の意味をmayが次第に担うようになり、shallが義務の意味を失うにつれてmotanは義務の意味を受け持つようになりOEからMEにかけて義務の意味の頻度を増やしていった。

## 5. 過去現在動詞との違い

can, may, must, shall, oughtなど (willは異なる) はOEにおいて過去現在動詞 (preterite-present verb) と呼ばれる一群の動詞に由来する。この種の動詞は、ゲルマン祖語でもとの強変化動詞の過去形が現在の意味に用いられ、元の現在形は消失し、さらに新しい過去形がその新しい現在形をもとに弱変化によって作られたものである。この過去形は本来、インド・ヨーロッパ祖語の非重複の完了語幹であり、完了現在動詞 (Perfecto-present) とも呼ばれる。

例えば、canは本来、knowを意味した動詞の過去形であった。さらにもと元の意味は“I have learned”(「知った」あるいは「学んだ」) という完了の意味を表していたと考えられる。「知った」「学んだ」という完了の意味は、学んだことを現在も「知っている」ことになり、現在の意味とつながる。ここから完了形あるいは過去形が現在を意味するようになったものである。

このような完了形の意味から現在を意味するようになった過去現在動詞の意味変化は、MEで、mustとoughtが現在の意味で用いられるようになった過程とは異なる。直接的な法的意味を和らげる方法として用いられるようになった仮定法過去形が、MEに直説法と仮定法の屈折変化が消失したことによって、過去形が現在の意味で用いられることになったものである。これらの2つの過程を混同してはならない。

## 6. *moste*のあいまいさと副詞*needs*との共起

### 6.1 *must needs*の文法化とあいまいさの明確化

Traugott and Dasher (2002) [以下ではT&D (2002) と略す] は、過去形*moste*が他の法助動詞*could*, *would*, *should*などと異なる点として、神の意志などの強い義

務の出所のある文脈と *nedes* との連語関係を指摘している。

As far as *must* is concerned, it is clear that when it meant permission, the embedded past tense uses were of the type Bybee adduces—they left open the question whether what was enabled did indeed occur. However, in the context of God’s will and other sources of strong obligation, any implicature that what was required might not have been fulfilled is only very weak, and easily cancelable by an adverb like *nede(s)*. [p.134]

T&Dは、*nedes* との連語関係がもたらした影響について次のように述べている。

(i) the frequent collocation with *nedes* makes a GIIN of the kind “it is unknown whether the required action occurred” unlikely. [p.135] (GIIN: generalized invited inference)

*nedes* が、要求されていることが実行された可能性を高める機能を果たしていたことを指摘している。しかし、なぜ *mot/moste* にだけ副詞 *nedes* が高い頻度で伴うのかという問題については何も言及していない。

Moléncki (2003) は、*mot/moste+nedes* (> *needs*) には文法化が起きていたことを指摘している。Molénckiによると、14世紀以降 *nedes* が *mote/moste* と共に頻繁に用いられるようになる。特に、Moléncki が調査した Helsinki corpus で、14世紀後半から見出される *must* の認識的意味では常に *nedes* を伴っている。この事実から、14世紀後半から15世紀にかけて *mot/moste* に後続する形で *nedes* が用いられて、語順が固定し文法化が起きていたと Moléncki は述べている。この認識的意味の *must* は、OEDでは、その最初の例として1652年の例を挙げているが、Visser (1969) はさらに14世紀後半の例を挙げている。*must* は14世紀後半には認識的意味で用いられるようになっていたようである。

副詞の *nedes* は、OEでは名詞 *nied* の属格 *niede* であった。この副詞の働きをする属格は、OEの時代に義務の意味を表す *sceal* (> *shall*) と共に用いられて、義務の意味を強める働きをした。

*Ic sceal eac niede þara monegena gewinna geswigian þe on þæm eastlondum gewurdon.* (Orsisus) [例は Moléncki (2003) より]

この義務の意味を強める *niede* が *mot/moste* と共起する最初の例は、Molencki によると 1122 年に書かれたと見られる Peterborough Chronicle の中の次の例である。

þeah hit him eallum lað wære þæt man *nyde moste* þaem here gafol gyldan.  
(Peterborough Chronicle 1006 1122) [Garmonsway 1972: that they were compelled by circumstances to pay tribute to the host...however distasteful it might be to them all]

11-2 世紀には、男性名詞属格の屈折 -s を持った *nedes* も用いられるようになる。さらに、14 世紀には *needly* という副詞が用いられることもあった。16 世紀初期には、*necessarily* も *must* に伴うようになる。

第3節でも述べたように、*mot/moste* が主として「許可」の意味を保持していたのは 12 世紀中ごろまでで、その後、「許可」と「義務」の意味の比率の逆転は 12 世紀後半から 13 世紀初期の間に起きたと考えられる。この後次第に「義務」の意味が *mote/moste* の中心的意味となっていく<sup>10</sup>。この時期に *mot/moste* が *nedes* を伴うことが多くなる。このことから、Molencki は *mote/moste* が許可と義務の2つ意味で揺れ動いている時期に *nedes* が意味のあいまいさを取り除く働きをしていた可能性を指摘している。

Molencki の指摘で特に注目すべき点は、14 世紀後半に *must* が認識的意味で用いられるようになったときに、義務的に *nedes* (> *needs*) を伴うということである。「許可」を意味する *motan* は 14 世紀のころには独立節で用いられることは少なくなり、願望・許可を意味する動詞の名詞節や願望・目的と関係の深い目的節、さらには条件を表す節の中でのみ用いられるようになった。この文脈は仮定法過去の *moste* がよく用いられる。次の例は Chaucer からである。

Chaucer L.G.W. 2264 But to hire husbonde gan she for to preye, / For Godes love, that she *moste* ones gon / Hyre syster for to sen, and come anoon, / Or elles, but she *moste* to her wende, / She preyed hym that he wolde after hire sende;

(But she prayed to her husband, for God's love, that she might once go to see her sister, and return at once, or else, if she might not [were not allowed to] go to her, she prayed him that he would send after her;) [小野 (1969) pp.119-20]

最初の *moste* は願望の *preye* の名詞節で、2つめの *moste* は条件節の中で用いられていて許可の意味である。同じ写本には次のような仮定法過去で義務の意味を表す例もある。

379 He *moste* thinke yt is his lige man,

(He must think it is his liegeman,)

2697 And nedes-cost this thing *moste* have an ende; / Or he or I *moot* nedes lese lyf.

(And this thing must of necessity have an end; either he or I must die,)

379行の例について、小野氏は述べていないが、認識的意味の *moste* であると思われるが *nedes* は伴っていない。2697の *moste* は仮定法過去で、*moot* は現在である。両者には *nedes* が伴っている。許可や願望を表す従節・副詞節で用いられる *moste* と弱い義務や認識的意味を表す *moste* とは形態が同じでありながら異なる意味を表す。

Molencki は、許可の意味と義務の意味のあいまいさを取り除く機能を *nedes* が持っていたことを指摘したが、もっと厳密には、従節の仮定法の *moste* と弱い義務の *moste* の2つの用法を明確に区別する働きを *nedes* が担っていたと考えられる。これが意味するところは、義務の意味の過去形 *moste* に *nedes* が付加される可能性が高かったというのである。このことは T&D (2002) が次のように述べていることから裏付けることができる。

Evidence that *nedes* is one of the relevant contexts not only for the development of epistemic *must*, but also for the crystallization of the past form is provided by the Helsinki corpus. All the examples of this modal with *nedes* after 1420 have the past tense form *must*, although in other data there continue to be some examples of *mot*- without *nedes* until the early sixteenth century. [p.135]

願望や許可の動詞の名詞節や目的・条件節の文脈で *moste* が用いられる最終例は OED によると 1400 年ごろである。あいまいさがなくなった後も、*moste* に *nedes* が付加されていたことから Molencki の言うように文法化されて、1つの固定化した表現 *moste* (> *must*) *nedes* となっていたことは明らかであろうと思われる。

## 6.2 mot/moste nedesの頻度

副詞のnedesは、どれぐらいの頻度で義務の意味のmotanに伴っていたのであろうか。Molenckiは具体的な頻度は示していない。小野(1969)は、motanに副詞のneedsが伴う場合とmust needsという語順で用いられている場合を記録している。次の表1は、小野(1969)の調査に基づいて、筆者が作成したものである。

表1 mustとneedsの頻度<sup>11</sup>

年	文献	方言	「義務」の意味の mote/mosteの数	needsを 伴う数 A	must needs B	A+B	nedesを 伴う割合 (%)
c1275	H.H.R.T	WSax	2	0	0	0	0
a1225	T.H.	S or Sax	4	0	0	0	0
c1250	A.R.	SWest	39	7	0	0	18
c1300	H.D	N-E Mid	0	0	0	0	0
1377	P.P.	Mid	30	1	0	1	3
1369-70	B.D		3	2	1	3	100
1372-80	H.F.		10	2	1	3	30
	A.A		3	0	0	0	0
1380-86	P.F.		5	0	0	0	0
	Boece		55	1	24	25	45
	T.C.		78	2	10	12	15
	L.G.W		22	0	3	3	14
1387-92	C.T.		195	5	18	23	12
c1400	Gawain	N-W Mid	4	0	3	3	75

Boeceでneedsを伴う例が45%と非常に高い割合をしめしている。この写本は、Boethiusの*De Consolatione Philosophiae* (= Of the Consolation of Philosophy)の翻訳である。1250年ごろの写本とされるAncrene Riweでもその前後の写本では用いられていないneedsが18%もmotanに伴っている。この写本は、修道女の戒律の書であるために、その内容から義務の意味のmote/mosteが多く用いられているようである。この写本もラテン語やフランス語からの翻訳であり、must needsは翻訳されたものに多い傾向が見て取れる。must needsの文法化は、翻訳の仕方から促進されたのかもしれない。

テキストによって、ばらつきはあるが、14世紀後半のBoece以下のmust needsの

出現の割合はmustが用いられているうちに3割を超える例で副詞のneedsが伴っていたことになる。この頻度は、going to/gonnaの場合と比べると文法化を可能にする十分な頻度である。going to/gonnaは、意図や未来を表す擬似助動詞であり、移動の意味を失っており文法化がかなり進んでいる例である。British National Corpusでgoの出現頻度が10,000語につき約10回であり、going to/gonnaの出現頻度が約3回であることを考えると、must needsに文法化が起こるのに十分な頻度といえる<sup>12</sup>。

must needsは、文法化が起こり、統語的に副詞の起こる場所が限定され、両者が1つの単位として義務的に共起するほどまでに文法化が進むと次の段階で意味の弱化が起こる。この意味の弱化を示す例としてMolenckiは次の例を挙げている。needsの意味が弱化したために、それを補うためにnecessarilyが付加されている。

These things no man is able to make indifferent, but they must needs be necessarily done. (Barnes Wks. 315.1. 1540)

16世紀中ごろまでにneedsはその本来の意味が失われていたようである。認識的意味のmustがneedsやnecessarilyを伴わずに用いられ始めるのは、Molenckiによると、16世紀から17世紀にかけてのころである。義務的意味と認識的意味の両方でmust needsが用いられなくなるのは19世紀中ごろである。

### 6.3 依然残る問題点

mosteが現在の意味で用いられるようになったことに関して、Molenckiは、仮定法が直説法よりも控え目で丁寧な言い方になるためであるというOEDの記述に従っている。ただ、mosteが現在の意味で用いられるようになったことには、直説法の2人称単数形現在のmostの影響もあったと述べている。さらに、現在形motが16世紀に用いられなくなったのは、mayの過去形moughtと混同されるようになったためであるとも指摘している。

過去形moste (> must) が現在形で用いられるようになったのは、直説法現在の2人称単数形mostが他の人称にも拡大されて用いられるようになったためであることはVisser (1969) [p.1850] でも指摘されている。これについて問題となるのは、OEで同じ現在過去動詞であったmagan (> may) もmotan (> must) と同じ事情であった



のになぜmustだけが過去形を採用したのかということである。OEでは, *magan* の直説法現在の2人称は *meaht* であり, 直説法単数1・3人称過去は *meahte* で仮定法過去は *meahte* である。MEでも, *may* の現在2人称単数には, *meight*, *maught*, *might* の形態があり, 過去形1・3人称単数では, *meighte*, *maughte*, *mughte*, *mighte* などの形態があり, 語尾の *-e* が弱化されると2人称単数現在と混同されることは, 2人称単数現在の *most* と1・3人称単数過去の *moste* の場合と同じであったはずである。なぜ, *moste*/*must* だけが過去から現在を意味するようになったのかという問題は依然として残る。

## 7. 法助動詞と副詞の関係

Hoye (1997) は, 認識的意味の法助動詞と法副詞をその可能性の高さによって, *possibility*, *probability*, *certainty* の3つに分類している。以下を参照。

Table 1 [Hoye (1997) p.240]

A Possibility	B Probability	C Certainty
might may could can	should ought to would will	must can't

Table 2 (ibid.)

A Possibility	B Probability	C Certainty
possibility conceivably perhaps maybe	probably quite likely most likely well	certainly definitely indeed presumably surely for certain of course undoubtedly necessarily

法副詞が法助動詞を修飾する場合には, 両者の間に意味的調和関係がなければならぬ。両端のAとCの助動詞と副詞は通常修飾－非修飾関係になることはない。

\*He might/may certainly be at home.

\*He must possibly be there.

possibilityを意味する助動詞は、certaintyを表す副詞によって修飾されることはなく、certaintyの助動詞とpossibilityの副詞は共に修飾－非修飾関係になることはできない。それぞれの助動詞はその蓋然性と法的に調和するような意味をもつ副詞としか通常共起できない。

但し、次のように法副詞が、法助動詞とは関係なく独立して用いられている場合は別である。次の文では譲歩の意味をあらわしている。

Certainly he may be there. (= It is certainly the case that he may be there.)

Hoyeは、中間のBの助動詞と副詞はAやCの副詞や助動詞と結びつくことは可能であるが、顕著な傾向として同じ蓋然性をもつ助動詞と副詞同士が最も共起関係を作りやすいことを示している<sup>13</sup>。

Table 1より、should/ought toは、mustより弱い蓋然性であるprobabilityを表すので、probablyという副詞はmustと共起しにくい。mustは、副詞necessarilyと同じ蓋然性certaintyを持ち、両者は共起しやすい。このnecessarilyについて、Hoyeは、mustの義務的意味と認識的意味の両方を強める働きをする唯一の強意語 (emphasizer) であるとして次の例をあげている<sup>14</sup>。

Any history of art written for the consumption of twentieth-century Europeans must necessarily regard the Giotto-Cézanne period as the most important section of art history. (J 1964: 298)

The judgment in these matters must necessarily be a harsh one. (J 1978: 63)

現代英語において、necessarilyはshould/ought toとは共起しにくく、mustと共起するのが通常であるということは、should/ought toの助動詞は、義務的意味の場合と同様に、認識的意味でも弱い助動詞であり蓋然性がmustよりも低くなっているためである。

## 8. なぜ、mustは強い義務を表すのか: 1つの試論

### 8.1 nedesの役割: 強意と意味の明確化

第7節で述べた現代英語の法助動詞と法副詞の関係を念頭において、MEの初期

にmot/mosteが副詞nedesと共に用いられたことを考えてみるとどうなるであろうか。nedesは現代英語のnecessarilyとほぼ同じ意味を持っていたと考えてよいだろう。nedesは強意語として直説法のmotを修飾できた。しかし、弱い法的意味をもっていたと考えられる仮定法のmosteとは共起することには抵抗があったはずである。多くの頻度でmosteとnedesが共起することはなかった。しかし、第6節で述べたように、願望や許可を意味する動詞の名詞節や願望・目的と関係の深い目的節、条件を表す節で仮定法過去mosteと弱い義務の意味の仮定法のmosteのあいまいさをなくす機能をnedesが持ち始めたとなると、仮定法のmosteと共起が可能となる。nedesは、強意語としての機能とあいまいさをなくすという2つの機能をもつことになったのである。mustが認識的意味で用いられるときには特に、願望や許可を表す動詞の名詞節や目的を表す節の中で用いられるmosteとの意味の明確化のためにほぼ義務的にnedesが付加された。

## 8.2 nedesの新たな役割: 仮定法mosteの意味の強化

このような意味の明確化と同時にnedesは、仮定法mosteの弱い義務の意味を強める働きを担うことになった。仮定法のmosteが現在の意味で用いられるようになると(この過程は、should, would, mightなどの助動詞と同じ)、現在形のmotとnedesが結びついて強い義務を表すのは当然として、仮定法mosteとnedesが隣接して用いられることによって、弱い義務の意味が強められて、現在形のmot nedesの場合と義務の強弱に関して、違いがほとんどなくなってしまったのである。これは小野がChaucerのmotとmosteが現在の意味で用いられたときに、両者には意味の対立がありながらも、意味の違いが非常に小さく、両者の意味の違いを感じ取るのが難しい場合もあると述べていることと一致する。

## 8.3 強い義務を表す2つの法助動詞

14世紀後半には、moteとmosteの義務の意味に強さはほぼ同じとなって、強い義務を表していたと言える。このことは2つの結果をもたらすことになる。1つはほぼ同じ強い義務の意味の助動詞が2つ存在したことである。同じ意味を持つ語が2つあ

る場合、そのどちらかが用いられなくなるかあるいはどちらかがその意味を変えるのが言語の歴史的変化が示すところである。同じ法的意味をもつことになった *mot* と *moste* では、*mot* が廃用となった。*mot* の廃用を促進した1つ要因は、仮定法や直説法過去形のみならず現在形2人称でも *moste* が用いられていたことで、*moste* が用いられる頻度が多かったためである。Helsinki corpus の ME の部分を調査した Molencki は *mot(e) nedes* と *most(e) nedes* の頻度の割合は 10:18 であると報告している。さらに、Molencki が述べているように、*may* の過去形 *mought* と混同されたことも *mote* の廃用に関係していると思われる。

もう1つの結果は、通常、仮定法から生じる弱い義務を表す法助動詞が欠落することにもなった。弱い義務を表す助動詞がなくなってしまったために、現在形の *shall* が義務の意味を失ってからも、空白になった slot を埋めるかのように、*should* が弱い義務の意味を保持しているのである。

*must needs* が全体として強い義務や認識の意味で用いられるとやがて、法助動詞の *must* が単独で強い義務や推定の意味を表すと感じられるようになる。これには、他の法助動詞 *can*, *may*, *will* などが単独でそれぞれの意味を表すことから、*must* も単独で強い義務や推定の意味を表す方が法助動詞のカテゴリーの内での形態と意味の対応がうまくいくという構造的な圧力があったためである。強い意味の *must* が確立すると、強意の *needs* は次第に余剰的なものと考えられるようになり、現代英語では用いられなくなったのである。

## 9. 結論

*must* が弱い義務から強い義務に意味をなぜ変えたのかという問題は、長年に渡って仮定法過去が現在の意味で用いられたということで片付けられ、あまり注意を向けられなかった。これには、「許可」から「義務」の意味になぜ変化したかという積年の難問の解明に気をとられていたことも関係しているといえる。

*must* が過去形から発達したことについて、OED ではこの論文の冒頭で引用したように、仮定法過去からの発達であり、歴史的に現在2人称の *moste* からではないと述べている。仮定法の弱い義務からどのように強い義務になったのかについては言及

されていない。

Jespersenの*A Modern English Grammar* (1.6 (1)) でも、mustは、motの想像の過去形 (the preterit of imagination) から現在の意味で用いられるようになったと述べられているが、なぜ強い義務の意味に変化したのかについては問題にされていない。Visser (1969) でも、弱い義務から強い義務への意味変化については何も述べられていないが、2人称現在と過去形が同じ形態になることが、過去形mustが現在の意味になる一因であったことのみ言及されている<sup>15</sup>。

Bybee (1995) は、would, should, might, couldの4つの過去形助動詞の意味変化について考察している。この4つの過去の助動詞が、現在を意味し、しかも弱い意味を持つのは、仮説的 (hypothetical) 意味で用いられる条件文の帰結節からの発達であることを明らかにしている。これらの仮説的過去の助動詞は、条件の意味が失われることによって結果的に弱い法的意味をもつ。Bybee (1995) では、mustについては考察されていないが、その注の中で、mustが強い義務の意味を持つことから、mustは過去形から発達したのではなく、2人称現在のmosteから派生した可能性を示唆している<sup>16</sup>。これはOEDの記述とは、全く反対の主張となっている。現代英語のmustを仮定法過去からの発達であるとした場合には、弱い義務と強い義務の意味の違いが考慮されていない。ところが、強弱の義務の意味の相違を考慮にいと、mustは過去形ではなく、強い義務の意味を持っていたと思われる2人称現在に由来すると考えざる得ないわけである。

Traugott and Dasher (2002) は、nedesという副詞が、許可された行為が実行された可能性を高める働きをしていたことを指摘しているが、なぜmot/mosteにだけnedesが高頻度で用いられるのかについては触れられていない。

Molencki (2003) は、motanの許可と義務の意味のあいまい性を明確にする機能をnedesが果たしていた可能性があること、さらには、moste nedesが、特に、認識の意味の場合には、文法化が起きていたことを指摘している。ところが、過去形のmosteが現在の意味で用いられることについては従来のOEDやVisserの考えに従っている。仮定法に由来する弱い義務の意味からなぜ強い義務の意味になったのかという問題は忘れられているようである。

この拙論では、以上の先行研究を踏まえて、*moste* (> *must*) がなぜ強い義務を表すようになったのかという問題に次のような解答を提案した。

1. 現代英語における法副詞と法助動詞の意味が調和的な関係にあることから、法副詞 *nedes* と、弱い義務を表す過去の法助動詞 *moste* は本来、結びつくことの少なかったものである。文法化が起きるほど高い頻度で *moste* と *nedes* が用いられるようになったのは、*nedes* が単なる強意の副詞だけではなく、あいまいな意味を明確にする機能も果たすようになったためである。その意味の明確化は Molenki (2003) の言うような、許可と義務の意味の明確化ではなく、願望や許可を意味する動詞の名詞節や願望・目的と関係の深い目的節あるいは条件を表す節の中の *moste* と、弱い義務を表す *moste* の間の意味の明確化である。願望・許可などの動詞の従節や目的・条件節は仮定法過去の *moste* がよく用いられる文脈であり、2つの *moste* はどちらも弱法的意味を表すために意味的に近いものになる。従節や目的・条件節での弱い許可の意味と弱い義務の *moste* とのあいまいさを取り除くために *nedes* が用いられた。このことが、結果的に *moste* と *nedes* の共起の頻度を高めたのである。

2. *moste* と *nedes* が頻繁に共起したことによって、意味論的に調和するように *moste* の意味が弱い義務から強い義務へと変化した。

3. 過去形 *moste* が強い義務の意味を表すようになることによって、*mot* と *moste* という2つの同じ強さをもつ法助動詞が並存するという結果になった。同義の2つの法助動詞の並存は、どちらかの助動詞の消失か意味変化の要因となりうるものであった。

4. 最終的に *mot* が廃用になったのは、ひとつには頻度の違いであると思われる。2人称現在と過去形であった *moste* の方が多く用いられていた。また、*may* の過去形 *mought* と16世紀には混同されるようになったことが *mot* の廃用に拍車をかけた。

5. 本来、弱い義務を表していた *moste* が強い義務の意味を持つことは、弱い義務を表す法助動詞が欠落する結果を招き、このことが *should* や *ought to* を弱い意味の助動詞として存続することを可能にした。

6. *must needs* は固定した表現となり、16世紀中ごろには *needs* が意味的に余剰なものと思われるようになり、16-17世紀かけて *needs* や *necessarily* なしで用いられ

始めた。しかし、must needsという連語関係はneedsがその実質的な強意の意味を失ってから19世紀中ごろまで維持された。

## 注

1. OEDの見出しではmoteとなっているが、OEの直説法1・3人称単数現在のmotを、現在形を代表するものとする。MEではmotの頻度が最も多いと思われるためである。OEやMEの過去形に言及するときも、同様の理由でmosteを用いる。推定されているmotの原形\*motanは、現在形と過去形の両方に言及するときに適宜使用する。motanは推定形であるが、asteriskは用いないことにする。
2. Ono (1989) pp.19-59.
3. Visser (1969) § 1690. Visserのこの考えはStandop氏の説を採用したものである。
4. 小野 (1969) p.124.
5. ibid. p.126.
6. Visser (1969) § 1693.
7. 小野 (1969) pp.74-75
8. Traugott and Dasher (2002) 3.4.1を参照。
9. Ono (1989) 第1章 Some Notes on the Auxiliary \*motanを参照。
10. Ono (1989) 第1章 §3.
11. 文献の略号が指すものは次のとおり。  
H.H.R.T.: History of the Holy Rood-Tree // T.H.: Trinity Homilies // A.R.: Ancrene Riwe // H.D.: Havelok the Dane // P.P.: Piers the Plowman // B.D.: The Book of the Duchess // H.F.: The House of Fame // A.A.: Anelida and Arcite // P.F.: The Parliament of Fowls // T.C.: Troilus and Criseyde // L.G.W.: The Legend of Good Women // C.T.: The Canterbury Tales // Gawain: Sir Gawain and the Green Knight  
方言の略号が指すものは次のとおり。  
WSax: West Saxon // S: Southern // Sax: Saxon // SWest: Southwestern // N-E Mid: North-East Midland // Mid: Midland
12. Krug (2000) 2.61を参照。
13. Hoye (1997) 5.2.3
14. ibid. 4.3.2.5
15. Visser (1969) § 1701.
16. Bybee (1995) p.516 Notes 7.

## 参考文献

- Bybee, Joan L. 1995. The Semantic development of past tense modals in English. In Bybee and Fleischman, 503-517.
- Bybee, Joan L. and Suzanne Fleischman, (eds.) 1995. *Modality in Grammar and Discourse*.

- Amsterdam: Benjamins.
- Campbell, A. 1959. *Old English Grammar*. Oxford: Clarendon Press.
- Coates, Jennifer. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm. [『英語法助動詞の意味論』澤田治美訳 研究社出版 1992.]
1995. The expression of root and epistemic possibility in English. In Bybee and Fleischman, 55-66.
- Denison, David. 1993. *English Historical Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Goossens, Louis. 1987. The Auxiliarization of the English Modals: A Functional Grammar View. In *Historical Development of Auxiliaries*: 111-143
- Harris M. and P. Ramat (eds.) 1987. *Historical Development of Auxiliaries*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hart, David (ed.) 2003. *English Modality in Context: Diachronic Perspectives*. Peter Lang.
- Huddleston R. and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Hoye, Leo. 1997. *Adverb and Modality in English*. Addison Wesley Longman Limited.
- Jespersen, Otto. 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Vol. IV. London: George Allen & Unwin.
- Krug, Manfred G. 2000. *Emerging English Modals: A Corpus-Based Study of Grammaticalization*. Mouton de Gruyter.
- Molencik, Rafat 2003. What Must Needs Be Explained About *Must Needs*. In David Hart (ed.), *English Modality in Context: Diachronic Perspectives*. 71-87.
- 中野 弘三 1993 『英語法助動詞の意味論』 英潮社.
- 小野 茂 1969 『英語法助動詞の発展』 研究社出版
- Ono, Shigeru. 1989. *On Early English Syntax and Vocabulary*. Tokyo: Nau'un-do.
- OED: *The Oxford English Dictionary*. 1989. Oxford: Clarendon, 2nd ed.
- Palmer, F. R. 1979. *Modality and the English Modals*. Longman Group UK Ltd.
1986. *Mood and Modality*. Cambridge University Press.
- Radden, Günter (eds.) *Metonymy in Language and Thought*. Amsterdam: Benjamins.
- Sweet, H. 1891. *A New English Grammar Part I*. Oxford: the Clarendon Press.
- Traugott, E. C. and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge University Press.
- Visser, F. Th. 1969. *An Historical Syntax of the English Language* Vol. IIIa. Leiden: Brill.
- Warner, Anthony R. 1993. *English Auxiliaries: Structure and History*. Cambridge University Press.